

須磨ノート 中国近代絵画編 (三)

須磨 弥吉郎 記述
西上 実編

須磨ノート54「虚谷和尚」

虚谷和尚

昭和廿一歳八月十日 (54)

虚谷和尚 (五四)

例言

草堂収める処多いが、虚谷作品の与へる力は偉大なるものがある。例へば「古木草堂図」(後述四十六頁参照)の如きは、山人の雅心を常に刺激して来る力がある。その印象の記憶を以て西国等^{スペイン}で接する風景画を観ると、寧ろ児童に類するやうな印象をさへ受けることが多い。略筆淡彩、虚谷は全く枯淡である。人間が若しこの枯淡の心境を解し、之に浸り得るやうになつたら占めたものであらう。こんなことを想ひつつ虚谷の筆を取る。

「虚谷和尚」

目次

例言 (続き)

まえことば

一、和尚の素描

二、作品概観

第三、草堂収蔵品要録

I、書条

(1) 对聯 (Ⅲ一〇三)「脱帽山水」

(2) 四屏書条 (Ⅲ三一八)

II、山水

(3) 金地山水 (Ⅲ一〇一)

(4) 早晨老松 (Ⅲ一四三)

(5) 独樹老夫懷杜陵 (Ⅲ一八七)

(6) 仿大癡山水 (Ⅲ二九一)

(7) 枯木草堂図 (Ⅲ三三五)

III、動物

(8) 金地金魚 (Ⅲ一〇〇)

(9) 瓢菜鼠の図 (Ⅲ一五三)

(10) 青藤金魚 (Ⅲ一九七)

(11) 春波魚戯 (Ⅲ二〇八)

(12) 金魚 (Ⅲ二〇九)

(13) 菊花と木鼠 (Ⅲ二一〇)

- (14) 三雄図(Ⅲ二一八)
 - (15) 仿宋桃花双鳥(Ⅲ二八八)
 - (16) 竹と猫(Ⅲ三五二)
- IV、花卉

- (17) 花卉(Ⅲ一〇二)
- (18) 春景(Ⅲ一二〇)
- (19) 湖中風味(Ⅲ一二〇)
- (20) 秋花(Ⅲ一二〇)
- (21) 冬景(Ⅲ一二〇)
- (22) 歲寒三友大扇(Ⅲ一八三)
- (23) 枇杷と雉(Ⅲ一九八)
- (24) 老松と双木鼠(Ⅲ一九九)
- (25) 荷花湖中風味(Ⅲ二〇〇)
- (26) 牡丹と水仙(Ⅲ二一一)
- (27) 風竹(Ⅲ二八九)
- (28) 懸崖菊花図(Ⅲ三五二)

目次終

例言(続き)

虚谷は金魚を描く。

金魚ではない。金魚の形と色とを藉りて、世界を、宇宙を、人生を描写するのだ。それが、虚谷作品常に看致する処である。又そこには哲学がある。それも理窟ではない。不言の間に、不行の間に、わからせる哲学である。その意味で虚谷は単に雅味をもつて絵を残したといふだけではない。後世の心ある人間にもキチンとわかるや

うにその人生観を残した和尚であつた。それも書道にその意味を書いたのでも、又た構図にそれをわからせたわけでもない。一木一草、一鳥一石の画法の間にその深遠な思想を自然と表現してゐることを、今その作品を離れば離れる程強く印象されるのを想ひ起しつこの稿を起すのは愉快である。

まえことば

在支十有一年の間に、山人が発見した訳ではないが、その佳さを少くとも再認識して同好の士の注意を喚起し、自然と洛陽の紙価に多少の影響を与へたのは、広東の蘇仁山和尚とこの虚谷和尚のものとの二つであることは、『梅花草堂往来』冊葉の部、第二「国朝冊」六十九頁から七十三頁に亘つて陳べた通りである。そしてその虚谷和尚についての概略は同上「国朝冊」(68)から(72)迄(六九頁乃至七九頁)の五点についての略叙に依りてもわかるのであるが、本冊には虚谷和尚の軸物についての記述をなすものである。又た前記「国朝冊」の外に「集錦」の項にも記述がある。

又た本冊を別冊にする所以については、「齐白石」の冒頭に述べた通りの関係に依るものである。

昭和廿年八月十日記

一、和尚の素描

国朝末の和尚の作品は、丁度明末清初の黄山派開祖、石濤のやうな重要な役割をなすものである。

山人が昭和十歳の春、蘇州を何度目かに訪れて、永照寺で「早晨老松」の大幅を観て(本稿Ⅱの(4))、その構図の大胆さ、雄大

さと、色彩の洗練せられたる、且つ又た全体に渾然たる悠遠性を具へたるのに驚いたものである。それが、虚谷和尚がこの永照寺で他界する直前の絶作である。山人は、虚谷が支那画の伝統を捨てないのみならず、支那趣味、もつと正確に云はば、東洋趣味を少ない線と点との間に、斯くも有効に、有意義に表現出来るものかと疑はねばならぬ程にあらはしてゐるのに驚くのであつた。

姓は朱氏といつた。元来新安県で生まれてゐる。幼くして詩書が巧みな上に、書法に通暁してゐた。絶て奇古絶俗であつて、画法は清新で、而かも着色は洋画水彩の風を想起させるものがある。構図、亦た極めて新時代的であるから、南仏派マテスの如きは、この虚谷の法を摸してゐるとしか思えない程である。

光緒丙申坐化すとある。叙上の永照寺が最後であつた。その寺の住職に訊ねると、和尚は道光八年、即ち一八二九年の生れで、一八九六年、七十二歳でこの寺院に卒すといふ。

金魚が最も特色ある、又た最も和尚の好む画題であつたし、又た木鼠等の指筆に特殊の画風がある。殊に金魚の目キンなるは、誇張に過ぎたやうで而かも全く自然である点は注意すべき手法である。

けれどもその作る所の山水のやうな古拙で而かも天趣のある画法は他に類を見ない処である。而して最近のやうに少しでも洋画風にも見えるやうにと画人が洋画を摸倣するといふ邪道に入るやうな時代に、和尚の如く中国画道書法の蘊奥を極めた上であればこそ達せられる、洋画も及ばない程の清新さと明朗性を具備した悠遠性は、漸く世の重んずる処となり、その魚、又は木鼠の一小品が千金を呼んだが如きは驚くの要はあるまい。「梅花草堂集」三十二頁へ五の十三（参照）

昭和十一歳の夏、一米国收藏家が滬上交通路の一古玩舗に於いて、和尚の「金魚」の図に千元を支払へりとして、一笑話の如くに山人に話したる外人に対し、山人はその当然なる所以を話すのであつた。

二、作品概観

和尚程作品の大きさと紙質と色彩とに留意したと思はれる作家は、山人の知る処では支那画壇を通じてないと云はねばならぬ。唐宋元明を通じ、支那の文人墨客程、画題に適はしい大きさと云ふ美術に、無関心であつたものがない。為に、余程の名画でも、もう少し大きさがあつたらとか、もう少し長かつたら、又は短かつたら、どんなに良いかと思はれる場合が非常に多い。然るに、和尚の場合には、その特有な又た得意な目金魚をものする時には、概ね長い紙でも金地か黄地の紙を用ゐていよいよ金魚を浮き出るやうに工夫してゐる。それが長い紙を選ぶ処に、金魚の遊ぶ水の動きを思はせる。そして金魚には思ひ切り赤い絵具を使ふ為に明朗性がグツと出て来る。そして「画在空的地方」の流義で画材を想ひ切つて少くする。

又た支那画が、絵が主か題が主かを疑はせるやうな場合が多い程、詩文などを書きなぐるが、和尚はその特殊な書法で、大体四字か五字で片付けてゐる。斯うして渾融悠遠の気分が自然と漂つて来る。

山水にして見ればよく真四角かと思はれる程の紙を選ぶことが多し。それが、丁度洋画の風景から受けるやうな天地自然を聯想させる。その苦心・工夫は、今観る者をして熟々と感ぜしめる程であるから、えらいものである。

例へば上にも触れた「早晨老松」（Ⅱのへ4）の如きは、その早晨の赤といふよりは真紅な色は山人の如く早晨の早旭をおろが

む者に予感される色である。そこを摺んでゐる。早旭の放つ真紅の色がもつ深みがちやんと出てゐる。それ故に、遠近法といった技巧は一向に使つてゐないけれども、自然と遠近が出て来る。

要するに和尚の作品は、観者にVision、想像の余地をウント残して置く。単に余白が多いとか空白が設けられてゐるといふ許りでなく、金魚や早旭のやうに積極的に強い色を用ゐる場合もあり、又た木鼠の如く、色を省いて墨色一点張の消極の場合もあるが、明朗性を出すのに苦心してゐる。そして、それが今頃の印象派がキザに態と手法を変へたるのとは全く話が違ふ。

和尚は自然を深く眺めたに相違ない。そしてその命を、生霊を、摺むことに苦心し、その命を画面に出すことを是れ努めたに相違ない。それが和尚の作品のもつ悠遠性の所以であり、由来であらうか。

第三、草堂収蔵品要録

I、書条

(1) 対聯 (Ⅲ一〇三)

昭和九年十二月十二日、滬上世界大飯店に開催の名人展に獲す。漢隸を虚谷流にこなしたる枯れ切つた筆なり。而して「脱帽山水」の句、虚谷和尚の対自然感と混りて結果せるところ、作品の悠遠性とを説き尽して余すなきの感あり。山人荻窪の草堂書斎の床にこの二軸を掲げ、樹間に富士の靈姿を望むは、蓋し荻窪生活爽快の一瞬たり。

(2) 四屏書条 (Ⅲ三一八)

昭和十歳十月一日、金陵浙江会館名画展覽に需む。前項同様の脱俗の極致に達す。之を掲ぐれば、雅韻悠然として湧くものあり。

II、山水

(3) 金地山水 (Ⅲ一〇一) (挿図1)

(1) と同時に名画展に需めたるが、蘇州永照寺の旧蔵にして、和尚の特色最も如実真剣に表現せられたる風景なるその金地の紙を改造するは、全く觀賞上、頭の下る洗練さあり。秋景をひとりで豪華版様に印象せしむるものなり。その樹木の紅葉を表現せん為、是亦た金魚の場合同様、真紅の色を用ゐ、併せて明朗性の強調にも役立たしめ居れり。本作は全く明朝の金扇でも見るが如き古淡の味を有しつつ、而かも近代的明朗性のみならず、印象派的技法をさへ想はしむる清新味を有するは、和尚の作にして甫めて見出し得る東洋美術の極致とも称すべし。

挿図1



(4) 早晨老松 (Ⅲ一四三)

昭和九歳十月十三日、蘇州に遊び、集古齋に到れば、永照寺に於ける絶作ありといふ。題は「双老旭松」といへり。本稿和尚の作品の部にて述べたる全くの絶品たり。

彩色紙本 豎二・〇九

横〇・九五

「梅花草堂美術写真帖」Ⅲ (68)

而してその大幅なること上記の通りなれば、是亦た和尚が画題に応じて周到なる注意を凝らしたること自づから知るべきなり。

(5) 独樹老夫懷杜陵 (Ⅲ一八七)

昭和九歳六月十二日、山人金陵より滬上に出づれば、蘇州盧会楼、本作を持来す。永照寺の旧蔵なり。故事に因める山水なれば、和尚全然墨色を以て画きなす。是亦た作意を効果的ならしむる為の特別なる考慮といふべし。盧会楼は、山人金陵を發せば、必ず情報ラヂオとなる。即ち、逸品あらば携行して山人の居、新亜飯店に来る。永照寺住職の親戚にして、草堂蔵の和尚名品茲に出づるもの多きは之が為なり。

(6) 仿大癡山水 (Ⅲ二九一)

昭和十歳三月廿三日、盧会楼より上海に獲たる逸品なり。その筆勢旺にして、而かも悠遠味の大なる、正に虚谷の珍品といふことを得べし。

(7) 枯木草堂図 (Ⅲ三三五) (挿図2)

昭和十歳九月十日、叙上盧会楼より滬上に需む。蘇州永照寺に於

挿図2



いては、(4)「早晨老松」と並んで絶作の一なりとして永く珍藏し来れるものなりといへり。草堂の朽ち果てたる如き感じと、枯木の寥々屹立する態、全く静寂の感を与ふ。和尚には明朗性豊かなると自然に没入するの概深きは、作品概観に於いて叙べたる処なるが、この両者の一步隣なる「孤独」の感、亦た時に強調せらるることあり。換言せば、大自然に融け合ふのとき、観者は正に孤独なり。大自然に吸ひ込まれ行く孤独を覚ゆ。この心境を画面の上に至る迄躍如たらしめ得るは、総体に於いて、和尚を以て唯一の大家ならんとも謂ふべし。本作その意味よりするも名作といふべし。殊に之を(3)金地山水の明朗の境地と對比せば、一皮深味に入りてこの孤独の域に入り、且つ之を画面に堂々と描出し得るが如き、大家たる和尚はその仏道に於いても底の知れざる深遠なる大悟を得たらんかなどと常に想像す。

Ⅲ、動物

(8) 金地金魚 (Ⅲ一〇〇)

昭和九歳十二月十二日、滬上世界大飯店に開催せられたる名人展観に於いて、(1) 対聯及び (3) 金地山水と共に、永照寺の旧蔵中より獲て且つ後者山水と対幅たり。金泥紙に金魚の出自、その真紅の色彩等相配合して渾融大自然を描出すといふべし。特に秀でたる金魚の中に於いても更に傑作なりと観らる。頗る印象的にして今その作を見ざること五年にして筆を繞らす。その間にも、画面眼前に輾開せらるるが如し。その深き印象は、正にその信念より迸る熱を以て作意とせるが為なりと断ぜざるを得ず。独り技法によるものにはあらざるなり。

(9) 瓢菜鼠の図(Ⅲ一五三)

昭和十歳一月廿六日、蘇州盧会樓携来。即ち永照寺の旧蔵なり。鼠といふも、写実味たつぷりなるが、その描振えがきぶりたるや独得にして表象的なり。珍品といふべし。

(10) 青藤金魚(Ⅲ一九七)(挿図3)

昭和九歳七月二日、例の盧会樓を通じ、蘇州永照寺旧蔵に獲たり。

淡彩紙本 豎一・四九

横〇・四〇

「梅花草堂美術写真帖」Ⅲ(64)

青藤を配したる名品なり。後出(23) 枇杷の図、(24) 老松、(25) 荷花等と四幅対にして、永照寺に珍宝として収蔵せられ居たるものなりといへり。

挿図3



(11) 春波魚戯(Ⅲ二〇八)

昭和九歳七月廿一日、蘇州虞景伯(永照寺住職の息なり)親みづから持来したり。

(12) 金魚(Ⅲ二〇九)

前項と同時に需む。金魚の中にも特別に異色ある作なり。永照寺に於いて特に大事にし居たりといふ。

(13) 菊花と木鼠(Ⅲ二一〇)

前項同断。

「仿解改館筆」と題せる書は、実に趣味深し。

(14) 三雄図(Ⅲ二一八)

昭和九歳十月廿日、上海に於いて蘇州盧会樓に需む。色彩並びにその勢いよき結構は、実に美事にして、他に類を見ず。又た虚谷和尚の作品中に於いても罕観といふべし。寧ろ洋画而かもウラマン派のSuyders辺の作の如き古典的の味を有するのみならず、他面西国スイイ近時風景画家の大家、ダリオ・レゴヨスの作の如き、雅にして而かも巧緻なる筆致をも彷彿たらしむる作にして、和尚の自由奔放なる画風の標本的なるものと謂ふべし。

(15) 仿宋桃花双鳥(Ⅲ二八八)

昭和十歳二月廿七日、滬上に於いて蘇州盧会樓に之を獲たり。古法に叶ひたる逸品なり。

(16) 竹と猫(Ⅲ三五二)

昭和十一歳十二月卅一日、蘇州集宝齋に獲たり。色彩淡泊にして佳作なり。

IV、花卉

(17) 花卉(Ⅲ一〇二)

昭和九歳十二月十二日、金陵に於ける名画展観に於いて獲たり。和尚の特色、最も豊富に表現せられたる作品なり。

(18) 春景(Ⅲ一二〇)

(19) 湖中風味(Ⅲ一二〇)

(20) 秋花(Ⅲ一二〇)

(21) 冬景(Ⅲ一二〇)

昭和九歳九月二十二日、金陵霍裴氏北陶閣展観に於いて、以上四季四幅を需めたるが、結局蘇州盧会楼が永照寺より抽出したるものなり。Ⅲ10に掲げたる青藤金魚(Ⅲ一九七)の相匹敵すべき名作たり。青藤金魚の作意は本作四点に移して以て観賞すべき観点なりとす。

淡彩紙本 豎一・一一

横〇・三三

「梅花草堂美術写真帖」Ⅲ (67)

湖中風味は又た夏瓢と題す。

(22) 三友大扇 (Ⅲ一八三)

昭和九歳六月二日、常熟沈石友收藏展観に獲たり。名品にして博物館展観の昇龍名扇集に蔵り。(冊葉、古冊の部参照)

「梅花草堂美術写真帖」Ⅱ (37)

(23) 枇杷(と雉) (Ⅲ一九八)

昭和九歳七月二日、盧会楼に獲たり。

淡彩紙本 豎一・四九

横〇・四〇

「梅花草堂美術写真帖」Ⅲ (64)

同じく蘇州永照寺の旧蔵にして名品たり。

(24) 老松(と双木鼠) (Ⅲ一九九)

昭和九歳七月二日、盧会楼に獲たり。永照寺旧蔵なり。

(25) 荷花湖中風味 (Ⅲ二〇〇)

同上。

淡彩紙本 豎一・一一

横〇・三三

「梅花草堂美術写真帖」Ⅲ (67)

(26) 牡丹と水仙 (Ⅲ二一一)

昭和九歳七月廿一日、蘇州虞景伯より、永照寺旧蔵中より獲たり。

(11) 春波魚戯、(12) 金魚、及び(13) 菊花と木鼠等と、同時に需めたり。

(27) 風竹 (Ⅲ二八九) (挿図4・5)

昭和九歳二月廿七日、盧会楼に獲たり。Ⅲ (15) 仿宋桃花双鳥と

挿図4



挿図5



同様永照寺に出づ。

淡彩紙本 竪六五

横四五

「梅花草堂美術写真帖」Ⅲ (63)

(28) 懸崖菊花図 (Ⅲ三五二)

昭和十二年一月一日、蘇州集□□に獲たり。同様永照寺旧蔵なること、主人の云ふ処たり。

小品なるも代表的の作品にして、色彩・構図、並びに変化ある花卉の状等、寔に上作なりといふべし。

山人父、八十八長逝したるも、日支交渉の為、帰朝し得ず。昭和十一年十二月八日、成都並びに北海等の細々要件の解決を、時々外交部長張群及び重州司長高宗武との間に片付け、日支関係一段落となり、上海に年末総決算に出張したる帰途、蘇州迄ドライブし、河西領事夫妻の懇切なる歓待にて越年し、在支十有一年の最も感慨深き三日を蘇州に送るの間、少閑に集宝齋等数軒の古玩舗を見廻る。忘れ難き在支紀念の旅なり。その旅に忘れ難きは支那絵画にして、その中にも亦た忘れ難きは虚谷等のこと冒頭にも陳べたる所の如し。

末女、吉弥枝が昭和十九歳嫁する直前に父に送れる書翰の中に、曾つて山人在京中、戯話の中にも「どれでも遣る」といつた中で、女学生の頃選べる虚谷の金魚の掛図を婚家に頂いて行つていいでせうと書けり。又次男、和章来翰中には時々虚谷を床の間にかけて楽しむなどと生意気なる記述あり。然れども、子供心にも何とはなしに染み込むやうなる虚谷の描写の色と力とは唯ものにはあらざるなり。

唐壁画中、「楊貴妃と三妹図」〔唐宋壁画〕へ三五五参照にし

て今尚博物館に在る名品は、未千秋・和章が尋常三四年生の頃に瞥見したるなり、「あれは買はぬか」といへる事実あるを、今茲に想ひ合せて、佳品の有する命と魂とは無心なる子供に一層反響をよぶ事、多多一般なり。この一瞬の印象こそ作品の有する、虚谷和尚の有する芸術的良心にあらずして何ぞや。

須磨ノート56「蘇仁山」

蘇仁山

昭和廿歳八月卅日 (56)

長春蘇仁山 (五六)

蘇仁山 (五十六)

目次

第一、まえことば

第二、仁山の正体

第三、仁山の作品

第四、草堂仁山作品類

I、書

(1) 書画二十葉冊 (三十二)

(2) 書幅 (三十七)

(3) 旧作詩七首 (五十五)

II、人物

(4) 看山一家文学の図 (一)

- (5) 三老図(二)
- (6) 人物(五)
- (7) 夫婦耕田の図(九)
- (8) 頓覚参禅悟前因証宿尼(十二)
- (9) 仿唐六如人物(十三)
- (10) 清夫人の図(十九)
- (11) 祝融人物(二十)
- (12) 文宗四像(二十一)
- (13) 靖虎樹陰読図(自画像か)(二十二)
- (14) 葛洪授経図(二十三)
- (15) 九老の図と跋(二十九)
- (16) 人物の図(三十)
- (17) 聖像二葉(小冊の一部)(三十二のへ二)
- (甲) 馬鳴観音と龍馬
- (乙) 獅子・文殊観音マヤマ
- (18) 老翁独座の図(三十八)
- (19) 童子言師採葉(三十九)
- (20) 九老の図(四十)(杉坂詩)
- (21) 無題九老の図(四十一)
- (22) 九老 劉濤観記(四十三)
- (23) 顕慶玄奘瑱珉勒銘(四十五)
- (24) 参禅宿尼画並びに題(四十六)
- (25) 問路(四十九)
- (26) 教誨(五十)
- (27) 秦医私・秦医緩像(五十一)

Ⅲ、山水

- (28) 朱震亨・馬仲化像(五十二)
- (29) 張元素・劉玄素像(五十三)
- (30) 淳子意・華元化像(五十四)
- (31) 東坡像(五十六)
- (32) 七人物(五十七)
- (33) 人物八題冊(五十九)
- (34) 墨意山水(四)
- (35) 墨意山水(六)
- (36) 山水(八)
- (37) 霜葉紅於二月花(十二)
- (38) 山水(十四)
- (39) 仿吳仲圭山水(十五)
- (40) 山水人物中堂(十六)
- (41) 木島海国の図(十七)
- (42) 賢劫菴莊嚴寺両祇園の図(十八)
- (43) 越井崗辺図(二十四)
- (44) 仿沈石田山水(二十五)
- (45) 米派雨山図(二十六)
- (46) 王逸少詩意山水(二十七)
- (47) 法謝女史山水(二十八)
- (48) 仿宋山水八題冊(三十一)
- (49) 山水四題(書画甘葉冊)(三十二)
- (50) 米派山水(三十四)
- (51) 弘仁法山水(三十五)

(52) 石田法山水 (三十六)

(53) 山水人物指意 (四十二)

(54) 山水 (四十四)

(55) 古人山水の図 (四十七)

(56) 避世山水 (四十八)

(57) 数十年山水 (五十八)

(58) 山水 (六十)

IV、花鳥

(59) 百鳥の図 (三)

(60) 鶏の図 (七)

(61) 花鳥 (十) 淡彩

(62) 双鳥牡丹墨意 (三十三)

第五、結言

第一、まえことば

支那南北十有一歳の放浪の間、古今の画作をどれだけ見たか知れない。然し発見といへば過言かも知れないが、何人も注意を懈つてゐたものを山人が選り出して明るみへ出したものは実に尠ない。勿論、先に齊白石について、又た瑞光和尚について、又た後に書く筈の容大塊等は、山人の大いに好み且つ博々吹聴した画人であつて、又それが幾分の因となつて有名になつたことは事実であるとしても、何れも此等の画人は、山人の吹聴なくとも、草堂の蒐集なくとも、世評に自然に乗るべき素質を有する画家であり、その作品である。然るに、蘇仁山に至つては、広東の生地^{に於いて}も誰も措いて顧みず、況んや支那の他の地方に於いてはテンで顧みられなかつた画

家であるのを、偶然にも山人が広東の町々を漁り歩く間に、文徳路の清秘閣で全くアンリ・マテスの素描のやうな味をもちつつ、宋元の法を喪は^{うしな}ない「一家文学図」を手に入れて「仁山」と略記あるのみなのに驚いて、清秘閣主人に訊ねても知らず、当時広東羊城随一の物識りで又た金輪社といふ高級美術店をも営んでゐた関君に聴いて見ても何の知識もないのを見あてたことは、山人一生の蒐集史中に忘れ難い一齣である。

全部が濃い墨意である。而かもその用墨に濃淡の別はない。それが全く仏派のデッサンといつた行き方である。そしてその構図は遠近法を無視したやうな平淡な描法で全体として頗る創意に富んでゐるは珍しい。仁山とは何者か。何時頃の人物か。諸参考書を渉獵しても見当らない。それが多く集めてからならば見当が漸次について来るわけだが、そこが大方の蒐集家の一人に洩れない山人、特に子供らしい程新しいものには、後では自分でも自然に微笑まれる程興奮してその何者かを探し度くなる。当り前ならば、誰でもいいとほつて置いていいのだが、その筆勢といひ、構図といひ、一刻も早くその作者の正体を見究め度くなる程の魅力^{を有する}作品である。

昭和六歳(一九三二年)、広東に国民政府が出来て、汪精衛・孫科等の大官が綺羅星の如く集まり、山人邸で毎晩のやうに支那第一流の大官・名流達を招くのであつた。一夜、汪精衛はこの「一家文学の図」に自然と眼を奪はれたといふ風に、又た惹きつけられて行つたといふ風に、山人の書齋に之を見つけて、「很奇怪的」(「全く珍らしいものですね」といつて、何人の作かと先づ山人に尋ねたが、未だ皆目分らぬことを答へると、是は確かに名家でなければ出来ぬ佳作である。何回か見直しては、感慨に堪えないといつてゐる

た。又た一座別の小宴で唐紹儀一家を招いた際に、老先生は全く此の作に驚いて、宋人の法になつた立派な作風であると云つてゐた。然し勿論その何人たるかは矢張知らなかつた。

斯うなると、一層山人の好奇心は増して来る。然し分らない。

唯この山人の好奇心は実は余りに初生^{ウツ}過ぎてゐた。といふのは、何時の間にか、山人が「仁山」といふ名作家を見付け、それを集めてゐるといふ評判が羊城にパツと立つて、爾来漁りに行く^{ウツ}と仲々安くは手に入らなくなつた。と同時に、今迄は全く目に入らなかつた仁山作品がチラホラ市場に姿を見せるやうになるのであつた。

初生に他人にも示したことは、善し悪しの両面的効果となつて現はれたが、今にして下手の後知慧を想ひ起せば、無言で先づ買ひ集める方が少くとも得ではあつたかも知れない。然し高くなつた代りに目星しいものまで現れ出した上に、結局、後の項に陳べる様に、作者蘇仁山の正体が略々わかり出して来るのであつた。斯うした経緯に依つて、仁山の別冊を茲に作らねばならない程の作品約六十点が草堂に入ることになつた。京都恩賜博物館長、故水田不二夫氏も仁山ものには驚いて居られたことを想起する。

第二、仁山の正体

後述の通り第四十三、九老の図に順徳の人、劉濤なる人の観記文が図幅の隅に書かれてゐた。それはかうである。

蘇仁山先生、号蓑春、吾邑杏壇郷人也、生平多読書、能書画詩
辞文賦、无不臻美出、筆萃古有金石味、焦墨造象尤称妙品、性
澹薄不羈、有古名士風、丹青一道未嘗從師、但下筆便成珠玉、
所觀先生遺稿非續奇逸、山水則写古人風範、或造諸天仙仏菩薩

象、及諸天名勝等、图中命意令人不可思議、先生之筆高不可学、
真天授其聰也、

此幀、用筆円厚渾成、洵造像中之傑作、可宝可貴、求諸近代、
实不易得、庚午秋、順徳劉濤觀并記、

(22) 九十一頁参照)

といふのであつた。山人は之を手に入れてどんなに喜んだか。兎も角、仁山の正体の手がかりを得た。その後、『広東通志』を初め、諸書を漁つて、結局、次のやうな人物であることを確かめるのであつた。(「草堂集」四六頁へ63)

蘇仁山、号長春、又号静甫。字靖虎。嶺南杏壇郷人なり。読書多く、生平又た書画を能くす。詩辞文賦亦た至らざる所なし。筆にする所則ち萃古金石の味あり。焦墨造像最も得意なり。品性、淡泊不羈にして古人士の風あり。丹青の一道未だ皆て師事せることなし。而かも筆を下せば則ち珠玉を成す。その遺稿を見るに奇逸ならざるはなし。山水は即ち古人の風範を写し、天仙・菩薩の造像を成せば即ち常人の想像すべからざる域に達す。筆力・画風俱に、唐宋の趣を具へ、而かも独創の意に充つ。

嶺南仏山鎮仁山禅寺の住職たり。画を需むるものあるも售らず荔枝(広東の名産。美果にして、荔枝一斗を以て唐の玄宗も楊貴妃を迎へたりとの故事あり)一斗を贈る者あらば、時に画を作りて之を与ふといふ。その性の恬淡たること観るべし。

肇慶(西江の左岸にある同地方随一の古都たり)の道台、仁山にその肖像を造ることを囑す。仁山勿論「世俗の相、我之を造り得ず」と嘯きて相手にならず、則ち獄に投ぜられて四ヶ月、四季の図を造りて道台に与ふれば、道台終に根負けして釈放せりといふ。

仁人は苗族の出故に当時蔑まる。是れ伝記も出でざりし所以なり。その作意は全く石濤・八大山人・石谿和尚等の領域を遠く逸脱して神韻を与ふるのみならず、肖像の線條に至りては、全く現代味をも顕著に具へ、遠く例へば明朝の丁雲鵬等の白描画の如く、貧弱なるものに非ず。

是で大体仁山の正体がつきとめられた。苗族なるが故の反感と憎悪から世に埋もつてゐたのを山人が見付け出したわけである。

要は仁山が以上の素描にも解る通り、決して尽常一様の画家ではなく、深い深い研究に基き、且つはその奇矯なる性格から来る強さと悠遠性とを以て天下古今独歩の作品を残したことだけはわかるのである。

仁山は道光丁未二十七年（一八四六年）には卅四歳であつたといふ記録があるから、結局、嘉慶癸酉十八年（一八一三）、広東省順徳眞碧江郷（蘇珥の近傍）に生まれた苗族である。それも作者の呼称を追へば「高陽苗裔」である。即ち菩提尊者高陽苗裔蘇氏長春住仁山禪林とあるは此の故である。

荔枝を贈るとあるは、他に又た仁山性来、甘草欖（肉欖、青果）を好み、之を贈る者には画を与ふるも、直ちにその絵を持去らざれば自ら裂き棄つとある。又た一書に依れば、一日、仏山の道台、その画像を需めたる上、四幅を絵かねば解放せずと軟禁せるに、仁山、死像四聯を造りて与へたりとある。又た彼には妻子がないやうである。書画冊（一）（三十二）の一葉に「卅にして妻子なし」とものせるはその証なり。「一家文学図」は彼仁山自身の家族の画像の如きも、子女の像なきはその証ならんか。

性奇矯なる上に、苗族なれば、娶らんとするも能はざりきとも伝

へらるるも、早世したる為かとも称せらる。結局最も得意らしき作品も四十数歳頃の作と思はる。

第三、仁山の作品

前項の仁山の横顔でも略ぼ伺はれるのだが、その作品は用墨の濃淡を分たず一色を以て仕上げるのは全く近代の「デッサン」に観るが如くである。

そしてその作品で題を欠くものは尠なく、而かもその題は、普通の作家の場合のやうに旧詩か古賦を唯だ単に録するといった簡単なものでなく、又さうした場当りでなく、必ずやその作意に符合する長文の、而かも踏韻等を巧みに配合した名文である。つまりその作意や題意に永く思ひを凝らしたものであることが一目瞭然である。是が仁山もの総般に通ずる原則である点は、他の作家に見出されない優秀さである。即ち運筆等に於いて奈何にも瞬間的の着想に依つて作為したかの如く見えはするが、実は一線一条一点一劃総てを熟考の後、仔細に施したものであることが読まれる。

草堂所蔵の六十点を通じて、反覆は殆ど皆無であつて、実にヴァリエターに富む点を想はば、その優れた画家であることがわかる。そして題字等の宋法にかなつてゐる点と、字劃又は文字そのものの大きさに至るまで、作意を活かすために満遍なく考慮を加へられて居る点とは、全く歴代の支那画を通じて見られない特色である。

梅花草堂集する所六十点上るから、之を他の別冊の例に倣ひ、I、文字及び人物、II、山水、III、花鳥の類に分けて見るが、各題下の番号は草堂買入の順序に依る通し番号である。

全般を通じて潑刺たる元氣あるは、前項「仁山の正体」の末尾に

陳べたる如く、得意の作は概ね四十歳前後のものなる為ならんか。仁山は興至れば則ち筆を呵して画をなす為、その筆勢奮ならざる線なるが、実は筆力咄嗟の如くにして、作意は則ち総て永き冥想の結果たるが故なるべし。

書法は十六帖を会得し、漢隸八分・楷書・草書、一として佳ならざるなし。どちらかといへば、書風、明朝、二水張瑞図に出づる所多きが如しと雖も、又た六朝唐宋の風をも学べる跡、歴然たり。老年の作ならんか、後述「越井崗山水」の如きにある題字は、枯れたるものなり。絵は恐らくは八大山人・石濤・石谿の筆意あること、前にも述べたる通りなるも、また文徵明・沈石田、乃至は唐寅の墨意即ち明朝の風格、尠なからず。又た上官周竹莊道人にも私淑したる跡あり。又た全体として宋文の風格あることも前述せるが、実は、此等の痕跡は謂はば表文的楷法の謂にして、根本は獨創性特出せる作品多し。筆意必ずや仁山独自永年の冥想の結果に出でたるものなるべきは否み難し。

仁山作品が全体として、苗族にして虐げられ居たるに拘らず、聊かも悲調を帯びず、寧ろ却つて諧謔味と醜嘲味を多いに有するは、正に仁山ものの面白さといふべし。一言にして、仁山ものには何れも幾分のユーモアを含むは、蒐集家にとり奈何にも鞭撻さるるが如き快感を与ふるものなり。

第四、草堂仁山作品類

I、書

仁山作品には概ね題字を有す。それが立派な書幅とも見られる程であり、或意味に於いては、全部の作品に書を論ぜねばならぬのだ

が、茲には本能的に書道だけのもののみを掲げることとする。

(1) 書画二十葉冊 (三十二)

廿葉中、十四葉は全部書で、之によつて、

(イ) 仁山自身の來歴を語るもの、

(ロ) 仁山が如何に綿密に古人の書画に思ひを窃めて研鑽したかを物語るに足る資料、

(ハ) 般若波羅蜜多心經の写經にして仁山が熱心な信徒たることを、正直に語るもの、

からなつてゐる。そして十四葉共、実に立派な書体から成つて居り、本作は全く前数項に述べた通り、獨創には富むが、古人の書画を並々ならぬ熱心を以て研究した跡を示すと共に、書だけでも余程多種多様の拓本なり、写本なりに就いて、研鑽を懈らなかつたことを如実に示すものである。

この書画冊は、約卅四歳頃の作らしく、その來歴を語る資料に充ちたる点は尊い材料である。

(2) 書幅 (三十七)

書幅は六十点中、二点あるのみで是がその一つである。

(3) 旧作詩七首 (五十五)

仁山の作詩の妙をも自然と知らるる名品である。書幅を需め度い許りに漁つて見たが、前記(2)が一点だったのを、山人が昭和六歳、広東を去つてから、羊城在住の硯商、多賀谷店主が特に見つけて金陵に送り附し呉れたるものの一点が是である。

II、人物

作品の項に略叙した通り、金石の味あることが総括的な特色であ

つて見れば、人物にしても金石の味を喪はない。但し、例へば姚華が敬摸するを得意とする六朝、又は唐宋仏の如き金石とは自づから趣を異にしてゐる。即ちマテスのデッサンの如く見るといつた点でも解る通り、金石を写して出る味ではなくして、仁山のものなる点と線とがおのづから金石の響を伝へる形象を表顯するのであり、此の点でも茫父姚華などは段違ひな深味を有するものである。そして多分に表象的な味をさへ漂はせる点は、見逃してはならない。

(4) 看山一家文学の図(一)

「梅花草堂美術写真帖」Ⅲ(66)

墨意 豎一・八八(五尺)

横〇・九〇五(三尺)

四十歳頃の作と思はる。

まえことばにも略叙せる如く、山人は本作を先づ見つけて、その筆勢・作意の尋常ならざるに研究を始め出せるものなり。

恐らく仁山の一家の写生なるべきか。卅歳にして妻子なしとは

(1) 二十葉冊(三十二)に自述せる通りにして、この作に依りても、仁山の血族と思はるる者のみを写出せり。筆致の雄大、無類の傑作なる、又大作なる本作が、先づ山人の手に入れるは不思議といふべし。若し他の大して目立たぬ小作が初得品なりしに於いては、草堂は終に仁山の蒐集を有せざりしやも知れざりしなり。仁山もの蒐集談そのものが「往來綺談」にも略叙せる如く、山人蒐集談中の最たるものにして而かもこの一家文学の図、その面白さ忘るべからず。第一、一家の老若男女が何れも書物などに魂を打ち込むの瞬間を描けるその創意を見るのみにても快大なるものあり。而かもその筆勢の太々しく豪勢なるは、他の時代、他の画家に求めて得べ

からざる所なり。唯だ「看山一家文学図」と大書のあるのみにて他に文字なし。且つ茲に所謂「看山」の二字に就いては尚ほ研究の余地あり。仁山に亦た或は看山の号を有したるやも知れず。果して然らば、そのみにて本作が仁山の一家を描写せること疑ひを入れず。然らずとして、又た他の名称にあらず、山を眺めるの義なりとせば、尽きざる興味を覚えしむるものなり。孰れにせよ、本作は山人第一の発見作たるのみならず、草堂藏品中の逸品といはざるべからず。豈独り仁山作品としてのみならず、他に類を見出し難き佳作といふべし。

(5) 三老図(二)

幅三尺の横ものにて、乙巳夏とあれば卅二歳の作か。三老共美事なるも天を仰ぐ姿の一老の表情は何とも云へぬ出来なり。唯だ多少粗雑の癖と又た癖たりしなるべき癩癩の跡なきにあらず、脚辺の筆致定かならざる所あるは是が為か。

(6) 人物(五)

長さ三尺、幅二尺五寸の軸にして飛白字に無印。最も独創的なる人物なるも、強いて云へば八大山人の筆法を彷彿せしむる点少からず。仁山が得意とするは人物なるを裏づける作品たり。

(7) 夫婦耕田の図(九)

丁未とあれば卅四歳の作か。白地にして、長さ三尺五寸、幅一尺五寸の仁山の代表作と思はるる名品なり。農家の夫婦が水田に牛を遣るの図にして、題字も例に依り立派なものなるが、人物兩人共、仁山独歩の天地を示して遺憾なし。又た特にモダン味ありて洋画のDesignを想はしむ。而かも牛に至りては全く水絵の感あり。全体として興味津津たる画幅なる上、仁山の真率味を想はしむる代表作た

り。

(8) 頓覺參禪悟前因証宿尼(十二)

擬王翽画法。魃潺録。

長さ三尺、幅二尺の、仁山が、仁山禪寺、否な、禪林の朝まだき梵鐘を聴きつつ、永年の想像が描けるにも似たる難解の図なるが、人物実に上出来なり。

(9) 仿唐六如人物(十三)

六十五歳前後の老後の作にして、三尺五寸に一尺五寸の軸なるが、仁山の作として罕に觀らるるの落着に富み、雅味掬すべき典雅の作なり。明朝作品とも見らるる程の本筋の絵にして唐寅を摸して唐寅を超えたりとも謂はるべき名作といふべし。

(10) 清夫人の図(十九)

白地にして四十五、六歳の作か。

長さ三尺五寸、幅一尺五寸たり。地も白く、想も練れ、分別盛りともいふべき屈絶の作、蘇東坡・清夫人等思索。「種々相在得意」題字を以て自然に描出せる佳品なり。

(11) 祝融人物(二〇)

長さの三尺五寸、幅一尺五寸の軸にして、黒地六十歳前後の作と覺しむものにて円熟を見せ、老人の姿、特に罕に見る老巧さを示せり。唯だ紙地余りにも暗色を呈したるは吝むべし。

(12) 文宗四像(二十一)

長さ四尺、幅一尺二寸の軸にして、六十四、五歳の最も円達せる頃の作か。且つ得意の大胆なる対角線を用ゐて、遠近法の表象派的傾向を表現し、草木の描法は全く表象派の先駆たり。想像も極致に練られたる傑作といふべし。宋の文宗の像にはあるも、誰にても可

なり。如何なる人物が如何なる時代に於いても、その時々の一ムード(抹怒)の相違に依りて、格別の相違を示す種々相を、表象的に又た諧謔的に描出せる力作たり。

(13) 靖虎樹陰読図(二十二)

長さ三尺、幅一尺二寸の手頃なる作にして、五十歳前後と思はるものなるが、題跋もなく、而かも別号靖虎の二字を印したるが、惟ふに、仁山の自画像にてもあらんか。高士、老樹を仰ぎ見る図にして、樹幹に「虎」と覺はしき影を描けるは、諧謔か、諷刺か、兎も角、実に注意を要すべき作品に数ふべし。

(14) 葛洪授経図(二十三)

長さ三尺五寸、幅一尺五寸の軸にして五十歳前後の作と思はる黒地の作なり。竹莊道人上官周を摸せりとあるも、地は淡黒色に塗りつぶしたるあたり、寔に大胆なり。

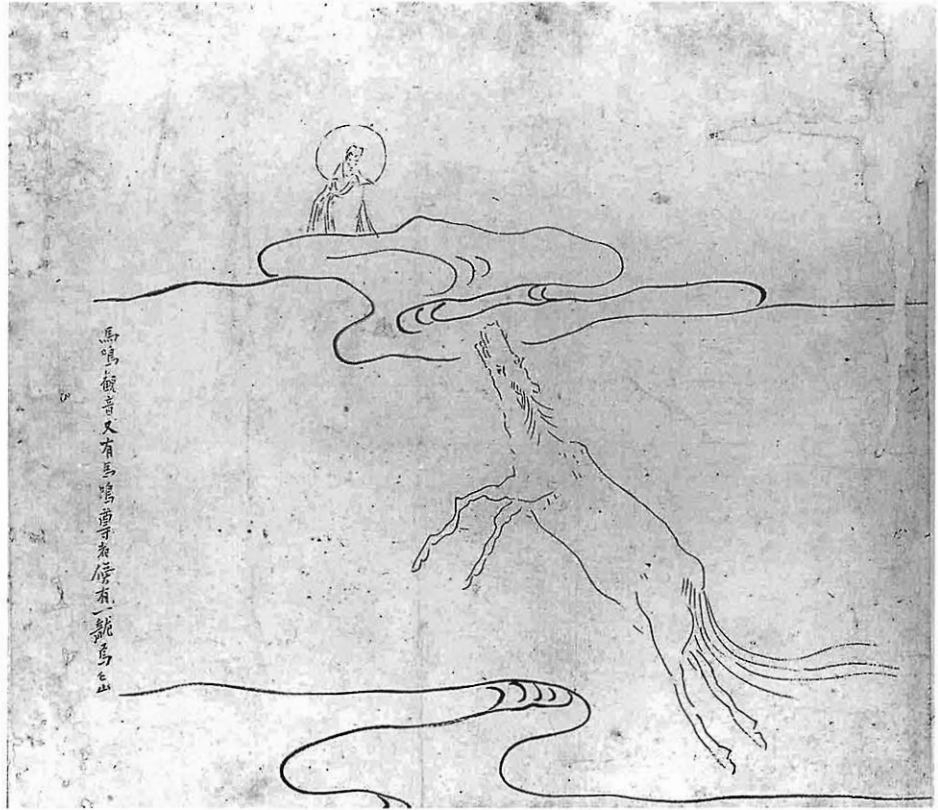
前記(12)(二十一)文宗四像でも知れる点をも看取し得る作たり。上官周にも私淑せるを示す作品なり。

(15) 九老の図と跋(二十九)

丙午仲秋とあり、三十三歳の作なり。長さ三尺五寸、幅一尺二寸の軸にして、歳は若かりし如きも、その時代としては最老巧振りを發揮せる筆致を閃めかせ、九老の表情は、前記(5)三老図(二)に於いて述べたる所の如く、若年のもの妙を發揮せり。その背後に巍峩として屹立する巖嶽を描ける、蓋し妙絶といふべし。紙地亦た白く、草堂所蔵品中、白眉の部類に属す。

(16) 人物の図(三十)

長さ三尺、幅一尺の軸にして六十歳前後の作たるべし。人物の筆致も余程こなれ、特に題字は枯れ切りたる点、特に目立つ程なり。



挿図6

(17) 聖像二葉 (三十二のへ二)
 前記(1) 書画二十葉冊 (三十二) 中の二葉たり。卅四歳位の作
 たり。

(甲) 馬鳴観音と龍馬 (挿図6)
 明朝の名家、丁雲鵬をも顔色なからしむる程の出来栄なり。元来
 本冊は、仁山の最も力作にして、その経歴と抱負とを後世に残さん



挿図7

とせるものなれば、意気実に軒昂の佳作たり。
 (乙) 獅子・文殊観音 (挿図7)
 前項(甲)と同様、気魄横溢せる佳作たり。

(18) 老翁独座の図 (三十八)
 小幅なるも面白し。
 (19) 「童子言師採葉」 (三十九)

繊細なる妙筆を用いて古詩を表現せる珍作にして、軸亦た手頃に
して、床にかけ眺むれば、趣、特に深し。本作の如きは、味へば味
ふ程、仁山の筆致、稚拙にして老巧の域に達せるを觀るべし。

(20) 九老の図 (四十)

昭和九歳六月廿日、時の第三旅隊司令官、杉坂少将に贈る。

〈杉坂詩〉

題蘇仁山之筆意

筆鋒靈妙総詩魔、至宝如君存豈多、

聞隻手声真謂此、如陳上野衆奔波、

同

快筆縱橫無不珍、公從何処得斯神、

前人未踏咸靈粹、極致凡之苦与辛、

對馬 杉坂生

(21) 無題九老の図 (四十一)

蓋し絶筆歟。一筆一点、総て九老の性癖を表現し得て余蘊なし。

白眉なり。墨色、特に豊にして深遠、実に悠遠性に富む。

(22) 九老 劉濤觀記 (四十三)

第二「仁山の正体」二十九頁に、劉濤なる仁山同郷同好の人物の
觀記あり。之を有する本作は白描の一線一点の外に無限の趣あり。
劉濤觀て傑作となせる故あるなり。殊に大宇宙を無造作なる劃線を
以て表現せる最も意深し。仁山、特に人物に長ずるも、好んで九老
と四像の文宗を写す。蓋し仁人居常の哲想を觀るべきなり。

(23) 頭慶玄奘瑣珞銘 (四十五) (挿図 8)

銘文難解なるは、仁山の特色なるも、この作の題意知り難し。但
し、その表現せんとする人物は実に絶佳なり。古筆を擦りつつ、も

挿図 8



のせるが如き裡に、自づから湿润の色見ゆ。出色の作といふべし。

(24) 參禅宿尼画並びに題 (四十六)

題字の雄渾なる仁山の趣を躍如たらしむ。蘇滌と款せるより見て、
余程の出来栄なりしは想ふべし。

(25) 問路 (四十九)

二人物。蓋し老年の作ならんか。有梅花草堂主人題。

(26) 教誨 (五十)

三人物。有昇龍山人題。

(27) 秦医私・秦医緩像 (五十二)

山人羊城を去りても仁山の作品には恋々たるものあり、幸ひ羊城
に於いて硯石を估あきなふ多賀谷店に囑して作品を送らしむ。昭和十歳六
月五日、上海に送られたるもの是なり。

(28) 朱震亨・馬仲化像 (五十二)

同上。

(29) 張元素・劉玄素像 (五十三)

同上。

(30) 淳于意・華元化像 (五十四)

同上。

(31) 東坡像 (五十六)

同上。

(32) 七人物 (五十七)

同上。

(33) 人物八題冊 (五十九)

同上。

Ⅲ、山水

仁山、素より人物と書法に特に秀でたるは数次前叙せる所の如し。然れども、仁山の山水、亦た妙を得たるは、人物の背景に配せる山水、殊に(12)文宗四像(二十一)の背景の表象伝ふるは既に叙べたる処の如く最も特異の妙技たり。それ以外に、古人、殊に宋元明の大家の法を得たる山水、実に巧みにして洋画のグラバオ(版画)にも、又た日本の浮世絵の式にも比すべき程の、支那としては全く未知の世界を開拓し居るは特記に値ひす。

これをよするに
要之、山水も他の人物等と同様、独創の悠遠味に富む点は特に蒐集上の新天地であることを思はしめるものである。

(34) 墨意山水(四)

長さ四尺、幅一尺五寸で、墨色実に豊かな作である。

(35) 墨意山水(六)

長さ四尺、幅二尺五寸である。

(36) 山水(八)

長さ三尺五寸、幅一尺五寸である。

(37) 霜葉紅於二月花(十二)

甲辰秋日とあれば卅一歳頃の作なり。長四尺、幅一尺八寸なり。

仁山が最も脂の乗りし得意のエボクの作と見らる。西南苗族の爲、世に出られず鬱を晴らさんとしてこの頃の作を觀ることを得。後世知る人あるべきを確信しつつ不羈奔放の筆を振へるの跡、顕著なり。その意味に於いて最も興味ある山水画といふべし。運筆甚しく自然にして勢のあるは、他の作と截然異なる処なり。構図としても最も特色あり。

(38) 山水(十四)

長さ三尺五寸、幅一尺五寸にして、さもなくは見ゆるも、色白き紙質なる上に、構想・運筆共に、仁山が奔放にして細心なる性格の持主なるを如実に示す傑作の一たるを失はざる名品といふべし。

(39) 仿吳仲圭山水(十五)

長さ五尺五寸、幅一尺五寸の大幅にして癸卯とあれば、仁山卅歳の作なるが、若年とは思はれざる円熟の作、而かも構図甚だ自然にしてオーソドックスの法にすら叶ひ、彼仁山が動々もせば限り勿き奇矯の癖を見ず。

(40) 山水人物中堂(十六)

長さ三尺五寸、幅一尺五寸にして、寧ろ人物がつけたりと見ゆる程の作故、山水の部に入れたり。

(41) 木島海国の図(十七)

長さ二尺六寸、幅一尺五寸「石成海」の概を示し、例へば洞庭湖、又た揚子江上に、一石一巖屹立して海国を為すの想なるが、筆致円熟、構図亦た老巧なり。七十歳位の作とも思はるる程なり。

(42) 賢劫菴莊嚴寺兩祇園の図(十八)(挿図9)

長さ二尺五寸、幅一尺五寸にして、紙地を暗色に染めて、福建所在の賢劫菴の細図をものし、是が題跋を篆字・隸書及び草書迄用ひ



て説示したるより見ても、恐らく仁山会心の作たるべし。大体七十
二歳の作と見らる。

(43) 越井崗辺図 (二十四)

長さ四尺、幅二尺五寸にして五十歳前後の作と思はる。字は黄庭
堅を摸したる。石田の画をも凌がむ許りの雄健勁強振にして、且つ
構図がダイアゴナル、即ち対角線的なる大胆さは草堂蔵古愚章谷の
作品(「明朝軸類」参照)にも匹儔すべきものにて八大山人の如き
粗なるものを廻かに勝ぐ点あり。

(44) 仿沈石田山水 (二十五)

長さ四尺五寸、幅一尺五寸にて明朝のものを想はしむる風格を備
ふ。

(45) 米派雨山図 (二十六)

長さ四尺、幅一尺二寸の大幅にして六十歳前後の作と思はれ、烟
雨に朦朧たる気分十二分に表現せられ、米派と石田の風とを俱に併
せ得たる如き上乘の作なり。

(46) 王逸少詩意山水 (二十七)

長さ三尺、幅一尺二寸、五十歳乃至六十歳位の作ならんか。王逸
少(羲之)の詩意に寓して「自づから足る」を知るの要あるを諭す
気味を以てものされたる細筆淡墨の作たり。僧弘仁の枯れたる作風
を想はしむる処多し。

(47) 法謝女史山水 (二十八)

長さ四尺、幅一尺二寸、謝春洲女史を仿ねたりといふも、概ね沈
石田の運筆に似たり。惜むらくは紙地暗色に過ぎたることなり。

(48) 仿宋山水八題冊 (三十一)

長さ七寸、幅一尺の手頃なる冊葉にして七十四歳の作と思はる。

仁山作品によくある如く紙地暗色になり居れり。是れ概ね收藏不
注意なりしに依る。又た本作の如きは永く匡底に埋もれ居たる為か、
傷み甚しきが瑕なるも、七拾四歳の絶作にして、構想・運筆、観る
者をして恍惚たらしむるものあり。而かも一筆をも苟且なほにせざる叮
嚀仔細を極めたる。古人も斯く迄出来たるものと思はる程の作風
にして、仁山画才の全貌を竭したるものとも見らる。恐らく、仁
山最後にして最大の作とも観ざるべからず。草堂蔵品中に於いては
金冬心五百羅漢南海手卷(「手巻類」参照)に匹敵すべき名品と
いふべし。仁山が本作を叔父天競先生法正として上款を録したむるは宜
なるかなと思はしむ。金輪社主人、関春艸君、山人に譲る。而かも
本作は(4)に掲げたる「看山一家文学の図」(一)の項に即ち第
二点として二十弗の捨値にて入手し未だ仁山の正体を究め得ざりし
頃の所獲品なるも数十元を投じて改裱に附して且つ喜び且つ驚きた
るは本作なれば、それが又た基点となりて蘇仁山蒐集に熱中せしめ
たる忘れ難き名品なり。

(49) 山水四題 (書画廿葉冊) (三十二) (挿図10・11)

卅歳より卅四歳までの仁山が自から生ひ立ちと研鑽の跡と抱負とて蒐めたる書画廿葉冊(へ1)書及び(へ17)聖像二葉参照)の末尾にある四題の山水なり。

(イ) 仁山が卅歳にして妻子無き、即ち自ら以て凄然たるを啣つといひ、その意を寓したる山水、即ち独峯屹立して山腹に秃木一本あるが如きものを作れるわけなり。

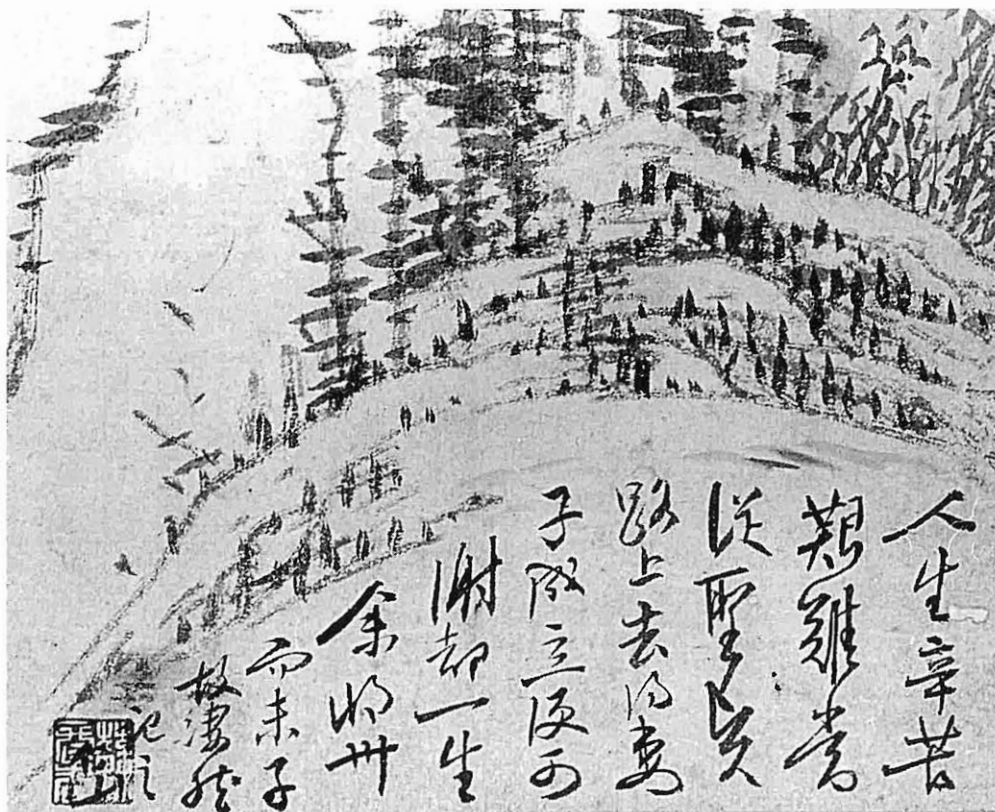
(ロ) 又た日夜観音像の前に双掌を合するの姿を表現するは珍風景といふべし。

本作は卅歳の作なるが、苗族なるが故を以て奇才を認められず、



挿図10

結婚すら思ふに任せざりしを啣ちたる冊だけに、流石多少哀調の否み難きものあるは事実なるも、寧ろそれは悲調に墮せず孤独(ソリチユード感)の響きあるに過ぎず。その題字の勢よき、並びに全作の筆勢、断じて衰へ居らず。仁山は飽迄明るき性格の人物なるを、



挿図11

本作が却つて強調する程なり。

(50) 米派山水 (三十四)

(51) 弘仁法山水 (三十五)

(52) 石田法山水 (三十六)

(53) 山水人物指意 (四十二)

仁山唯一の指頭画たり。指頭画として而已ならず古人を摸してその旧型を脱し、而かも仁山の「タイプ」を棄てず。草堂藏品中、中国画の「オーソドクス」を顕現せるものとしては罕に観るの出来栄え歟。

(54) 山水 (四十四)

行筆幼稚なるが如くにして尽常ならざる趣あり。

(55) 古人山水の図 (四十七)

題字並びに文、仁山独特の俗語を混へたる名文。行筆の枯れたる、年紀の明記なきも老年の作たらむ。一葉舟を遣る人物とその配置は、石濤翁の意あるも、更に古雅の風あり。元来、仁山の山水は、各々の先人の跡を辿れりと雖も、自づから宋元の基調を具へたり。此の作は蓋しその最たるもの歟。佳作の一たるを疑はず。

(56) 避世山水 (四十八)

仁山は素々世俗より超然たる人。筆を運べば即ち脱俗避世の趣あるも、本作は特に作者題して避世と云ふ程ありて、題文行筆共に凡庸の作にあらず。

(55) 及び (56) は、共に山人昭和七歳離粵後、沽硯の友、羊城多賀谷君、市上に獲たりとて同歳十一月転任の松平君 (中山の人) に託して寄せ来る。山人意嬉々。

(57) 数十年山水 (五十八)

同上羊城より送り来れるものなり。

(58) 山水 (六十)

昭和七歳十月一日、多賀谷君送来。

挿図12



IV、花鳥

(59) 百鳥の図 (三) (挿図12・13)

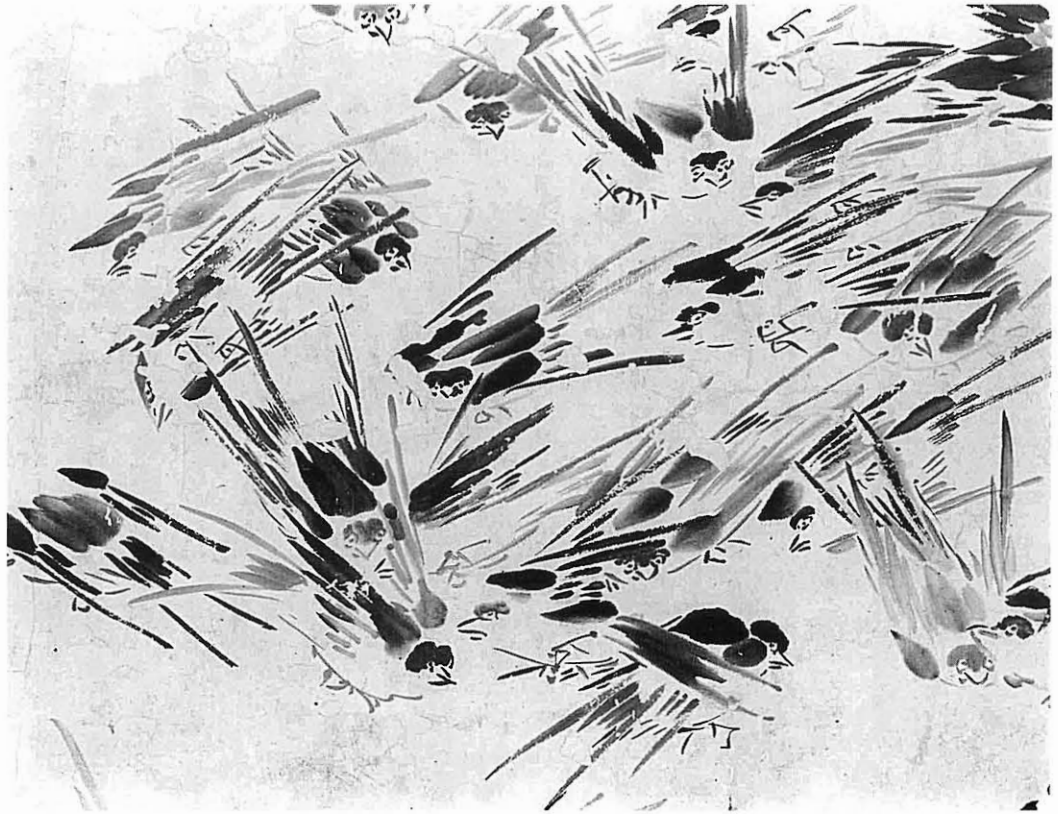
長さ六尺、幅三尺五寸の大幅にして七十歳前後、即ち晩年の作なり。

「梅花草堂美術写真帖」Ⅲ (41)

百鳥を描いて宇宙の種々相、森羅万象を表象せんとせる作者の苦心は全面に顕はる。

而かも老巧味亦た尠なからず。一方、諧謔味も多分に存し、仁山作品中 (4) 「一家文学の図」と相聯んで大傑作たるを疑はず。鳥の種々相、特に鶴・鷹の如き表現は実に妙を得て讚嘆せしむるものあり。

(60) 鶏の図 (七)



挿図13

長さ四尺、幅一尺五寸にして「三酉」とあれば、卅六歳の名品たり。鶏の輪廓を点線を以てせるが如き、特色大なり。次掲（61）（十）の淡彩花鳥の作に比せば、著しき進境を示すものなるのみならず、全体の筆致、冥想的なり。網地なり。

（61）花鳥（十）淡彩

長さ二尺、幅一尺にして卅歳位の作なり。仁山六十点の中、本作のみ淡彩を施し、又た仁山が最も嫌ひたる網地を用ゐたるより見て、余程の自信を湛えたる作なりといふべし。

（62）双鳥牡丹墨意（三十三）

長さ三尺五寸、幅二尺の大幅にして豪放なる作なり。花鳥を描いて宇宙哲学への仁山一流の観方を描写せんとせるの概あり。

第五、結言

在支十有一年間の走馬燈の如き多事ありし経緯は、先に「綺談」の中に陳べたり。唯だ茲に想起するは、北京・広東・上海・南京の日支問題の渦中を逐ひて転蹶せる跡を通観し、広東時代が宛も広東国民政府時代となりし点よりしても、又た満州事変の生起せる経緯よりしても、最も大渦巻に逢着せる時代にして、端なくも汪精衛・孫科・陳友仁・唐紹儀等、支那政界の大物と来往を始め、殊に山人畢生の友たる唐有壬・曾仲鳴とも知りたるもの頃なり。独り山人の個人的環境のみならず、帝国の東亜に於ける地位の史的考察としても最も重要な転機は、山人の広東在勤時代、即ち昭和五年より七年迄の間なりき。

梅花草堂蔵品としては前來巻を逐ひて叙し来れる如く、宋などのものは北京時代の蒐集に係る処多し。又た上海・南京時代も新国画の蒐集上に重大なる役割を有せること亦た否み難し。

然りと雖も、広東羊城の蒐集中に蘇仁山六十点あるは、謂はば梅花草堂収蔵中にそもそも仁山を見るに至り、否な、寧ろ仁山を鑑賞

界の明るみに出し得たる所以のものは、正に偶々山人が広東に在りし為なるを想へば、今仁山を略叙するに当り去来するの想、断じて尠なしとせざるものあり。換言せば、仁山を説き仁山を叙して東亜天地の変遷顧るの時、全く感慨の無量なるものあり。

「手巻類」に石濤の手巻を一九三一年九月九日広西省桂林に獲るの経緯を叙するに当りても、又た「往来綺談」の裡に於いても、山人が汪精衛・孫科等と相諮りて唐紹儀を委員長とする関東軍独裁の満州を具現せんとするを、横紙破りに満州国を形成せるに、今や昭和廿年八月十五日の御詔勅に依り、蘇聯が却つて関東軍独裁と同様の事態を逆に実現せんとす。

叙し来れば、万斛の涙あると共に、山人が仁山を見出したる程の歡喜を今斯の秋にも喫し得べかりし広東国民政府時代の歴史を想ひ起し、筆進まざるものあり。

その当時の汪精衛、一旦南京に還りて蒋介石との合作を復興せるも、更に重慶を逃れて河内に出で、終に南京に国民政府を形成し、帝国と磐石の盟を交せしに、その病歿後とは云へ、同志陳公博に依りて南京国民政府解体を宣誓せられ、字面通り満州事変以来の帝国の軍政両方面の努力全く水泡に帰して、東亜の帝国鴻業、それこそ元も子もなきに至れり。今斯のことを茲に論述せんとするにあらざるは勿論なりと雖も、東亜変転の一大契機に、事実今日の如き逆転を避くるの方策を樹ててそれを具現し得ず、爾来十有五年、帝国が国運を賭けその徒勞を招徠せるの結果となりたる現状に、全く身を切らるるの想ひ無き能はず。

茲に、政治を、外交を説かんとするものにあらず。否な、寧ろ極めて平明に長春蘇仁山を略叙せんとして偶々六十点の仁山作品が羊

城に出で、又た羊城に山人の在りし当時に東亜の命数翹きつつありしを仁山論と共に想起せられ、自然と去来する聯想を叙べたるにすぎず。

斯くして、截然と想ひ起さるるは、人生の話に於ける趣味の価値と影響なり。「綺談」の冒頭に於いて直叙せる如く、山人の蒐集癖は或は趣味を逸脱し、それが生活となり、それが人生となり切れるものとも観らるべし。さればこそ、仁山を叙し、羊城を想ひ、嶺南の風物と背景と人物とを追憶するとき、最早政治も外交も経済も総て是れ人生に渾融すべき事象に過ぎざるなり。

『草堂往来』は、結局美術論に終始せんとして、東亜の変転を叙することともなるべきは、冒頭「往来綺談」に於いて明言せる処なり。果然、往來を想起するままに筆に任せてものするの間に、今や重大なる青天の霹靂に会せり。その大變動の後、叙したる第一巻は「茫父姚華」なりしが勿論是とて主として南京時代の叙述故、時局と無關聯なる能はざりしと雖も、今この「仁山」の一卷を叙し終らんとするに当りては、羊城と仁山、羊城と満州事変、延いて大東亜の変局が想はれてならず。「長春蘇仁山」の一卷が端なくも此の結言を見るに至りたるは、『草堂往来』の本来の性質上、実に已むを得ざるの処といふべし。

昭和廿歳八月卅日稿

後記（昭和廿一年二月二日）

本稿を四ヶ月振に再見せば、この巻末結言記に何たる切々の情を自ら翹えあるかを想見し、自分乍らにその予感性の大なるに想到せざるを得ず。即ち満州事変にまつわる羊城在勤中の山人の動靜を想

起し、その責亦た断じて軽からざりしはこの稿に依らずとも明かなり。

而して今、戦争犯罪人の容疑を以て帰国せんとす。感慨亦た深きものあり。換言せば、本稿を稿せる八月廿九日に予想せる想いがそのまま実現して今回のこととなりしかとも思はれる程なり。筆稿は実に真の印象と感想とを伝ふるものなるは疑ひを容れず。その点口授せるものと自づから異なるは言ふべからず。

従来 of 著書等、概ね口授なりし為、その口授の時にさしはさ挿まれたる不純なる雑分子もありしは今より想見し得る所なり。曾て友人大倉公望がその筆記の日誌を回読して、当れる事象多き時機は健康なりし時機なりしと語れる事あり。山人健康なりしことだけは明かならんか。

須磨ノート84「草堂洋画」

草堂洋画 (84)

昭和廿歳十月三日

草堂洋画

目次

第一、まえことば

第二、北京時代

概言

(中略)

第三、広東時代

概言

(イ) 陳宏作品九品

(1) 花子肖像 (一)

(2) 山人肖像 (二)

(3) 広州市長堤の雑沓 (三)

(4) 嵐の前 (四)

(5) 東山奇松 (五)

(6) 香港の花市 (二十八)

(7) 詣でる老婦 (二十九)

(8) 香港アーケード (三十二)

(9) 静物 (三十三)

結語

(中略)

第四、上海・南京時代

概言

(中略)

(乙) 支那人画家

(イ) 劉海粟

(1) 牛 (一一三)

(2) 瑞西風景 (一二四)

(ロ) 王濟遠

(3) 室内 (四十二)

(4) 伊太利の女 (四十三)

(5) 雨後の西湖 (四十四)

(6) 中山陵紅葉 (四十五)

(7) 杭州紀念館 (一一一)

(8) 秦淮河辺 (一二二)

(ハ) 徐悲鴻

(9) 徐夫人像 (一七三)

(10) 柳榮楓作 蘇州風景 (三五)

(11) 郁風 朝陽 (一四四)

(12) 方菁作 塔 (二四五)

(13) 方菁作 静物 (一四六)

(14) 方菁作 風景欄班 (一四七)

(15) 夏生作 西山風景 (一六一)

(16) 夏生作 北平郊外 (一六二)

(17) 潘玉良 華山棧道西画 (一六三)

(18) 同上 青陽 (安徽) 夫子廟 (六四)

(19) 同上 蓮華峰 (一六五)

(20) 逸名氏 表象派樓閣 (一二六)

(21) 同上 (一二七)

(22) 広東省城 (一二九)

(23) 香港 (一三〇)

(中略)

第五、結言

目次終り

草堂洋画

第一、まえことば

草堂に在る洋画と一口に言つても、

第一、一九二〇乃至一九二四年、在英及び在独時代のもの、

第二、在支時代の九十七点、

第三、在米時代 (一九三七〜三九) の約八十点、

第四、在馬德里時代 (一九四一〜四五) の千七百点 (尤も約三

分の一は彫刻等)、

となるわけであるが、茲に草堂洋画として解説するのは、前記第二の在支時代の九十七点についてである。

蓋し、第一、第一次在欧時代のものも数も少く、今、宙に想ひ出せるものについても相当不確かな点が多いから、是は他日に譲り、又た第三の在米時代のものも、事実上、品川の第八高女陳列室に在るもので、その詳細の明細書が出来てゐるから之を省き、又た第四、在馬德里集については、相当詳しい目録並びに参考資料が揃つて居り、且つ此等は別にすることを適當とする部類のものであるからである。

結局、将来、洋画全体を一纏めにしたものを選べる時もあるだろうが、茲では在支時代のものだけにとどめる。又た事実、この廿五冊の『草堂往来』は在支十有一年間の記録になつてゐる点から云つても、その方が辻褄が合ふわけである。

第二、北京時代

第三、広東時代

第四、上海・南京時代

といふ土地に依る区分を以て概観することにする。

是は前述の如く本稿の範圍には入らぬが、例へば山人が一九二三年即ち大震災の大正十二年の春、伯林で獲た「マルガリタ」と裏に説明書のある和蘭派十六世紀名手の婦人肖像画の如きは、草堂二階

書齋に光つて居り、その写真を今回も偶然馬德里に持来した写真帖に在り、果然「西国史」"Historia de España por Antonio Balleore y Bereta"の第四卷のIのLamine III (page: 144) に出つゝるIsabel I de Inglaterra即ち英女皇イサベラ一世の肖像にして、倫敦ロンドンハンプトンコート宮殿博物館にあつてZuchero (一五三五―一六〇三)の筆に成るものとされてゐるものと全く同じで、それよりも年代が多少古くなつてゐることが、西国文部省美術局長、ロソヤ侯に依つて発見されるといふ快事があつたのだが、茲に掲げる支那時代の所獲品は、大体に於いて、邦人又は支那人の洋画であり、又た欧州人のものもあるが、概ね展覧會用に送られたものであり、自然第一流品とは勿論云へない。

殊に殆ど全部が現代品であり、前述のイサベラ一世の肖像の如き面白味は全く出て来ない。

そんな偶発事は別とし、元来洋画は飽迄洋画であり、また東洋人のもので西洋人を凌ぐといふやうなものは藤田嗣治とか栗原とか極めて少数のものに過ぎない。

その意味では、前記の如く在欧前期蒐集品・在米蒐集品や馬德里蒐集品等とは到底比較にならない。而かも草堂洋画中の特種であり、洋画自体としても面白味の豊かな重松岩吉については、別に「重松とソラナ」(一名「東西ソラナ論」)の中に詳述した処であるから、この稿には重松作品の列挙をして見るに止めたい。

それに前にも云つたやうに、展覧會ものである点が又た一つの特徴である。在支十有一年の経験からすると、邦人洋画家などの渡支した人達が展覧をやると、大体は旅費稼ぎの高品ものといった、何処となく、パサパサした感を免れない。尤もこの点では上海の太田

貢のやうな真面目な、又た上海地つきのやうな画家のものは全く違つた深味をもつてゐる。

唯その代り、支那の風景及び当時の雰囲氣を知り得べき一つの資料ともなり、又さうした觀察をすることに依つて一種の価値を認めることが出来る。

勿論、此等のものは、草堂にとつて、殊に「有壬館」の見地からするに於いては大切な作品許りである。

第二、北京時代

概言

北京は黄瓦赤壁の禁裏城は勿論、一木一草、景山から北海まで町全体が大きなパースペクであり、一つの大きな絵になるパノラマである。勿論支那式であり、東洋的であることは東洋のどの町よりも色彩濃厚であらう。然し青い空、紅い壁、黄色な瓦、紫色の天壇の屋根、北海ラマ寺の白い塔、春の緑、池の赤い蓮の花、特にライラク即ちいざれ各も美しい丁香花の紫と白の色、これをあげ挙此来れば色の交錯の町である。若し琉璃廠まで行くならば、正門外の大街道の両側の店と店の飾り。何といふ色彩の多い所であらうか。自然、洋画にも断じて格好な町である。

然し絵になるからといって、名画が何処からでも出るものではない。題材を咀嚼する画家が出て来ねばならないのだ。ターナーやマネーが倫敦橋を大芸術にしたやうに、禁裏城でも天壇でも、北海でも、懐仁堂でも中南海でも立派な大芸術家の洋画作を待つてはゐる。然しまださうした大きなものには至つてゐない。

草堂洋画中、小椋の二科会的筆法で北海の荷花池を描き、且つ成

功に近い作に集つてゐるものがあるが、まだ北京は擱んでゐない。名画は、倫敦橋を描いて英国全体を出すやうに、北海を描いて北京全体を、否な支那全体の雰囲気を出さねばならないのだが、その域にはまだ程遠い。

荷花の池、即ち「古城の春」と題した小椋の作は異聞ではある。然しそこにはまだ魂がないのだ。是は実の処、小椋でなくても、一般に支那をもまだ理解してゐない日本の画家に、而かも多寡がまだ何十年かの歴史しかない洋画の技を以て支那を表顯しろといつても無理ではある。斯うした意味あひでは、草堂洋画に於いてのみならず、日本洋画家に大きいものは少い。

(中略)

第三、広東時代

概言

広東時代は即ち既に『往来』の他の各所に述べたる通り山人の最も興味浅からざりし地点にして時期たり。汪精衛・孫科・陳友仁・鄧深如・胡漢民・李宗仁・白崇禧・陳濟棠・陳銘枢・蔣光鼎等、軍政両界の支那要人と相談するの機、最も多かりしと同時に満州事変前後にして多事なる時期なりき。

北京より広東(に來る)と地理的にも言語的に持た又た歴史的に全然別国とも解れるが如き感多し。

南国とも分なる上に、香港近ければ、洋風何処となく北京などに比して濃厚にして、自然、洋画家も多く此辺に発す。この点は前に現代国画の「洋画派」を論ずるに当りても又た「羊城中間派」を述ぶる際にも詳説したる所の如し。

この点より見て、広東に於いて二人の洋画家を見出せり。一は即ち重松にして、「東西両ソラナ論」に詳述せり。他は広東人、陳宏たり。陳宏は当時(昭和五歳)尚ほ卅歳を出て、未だ何もならざりしが、既に仏国に十数年も暮したる画家にして且つ天才的なる閃めきのある人物にて、その長女は当時七歳にしてピアノの名手と謳はれ居たる如し。色彩に明るく、全くマネーなどを狙へる筆法なり。山人が觀たる処、支那洋画家としては最も有望なる人物たり。今一人、丁衍生なる東京美術学校出身の洋画家あり。新派に属するも、勉強せざる中流画家なりしと記憶す。広東時代に獲たる卅三点を挙げるこ次の如し。

(イ) 陳宏作品九点

(1) 花子肖像(一)

色彩佳なり。殊に綠色巧みなるも全体とし硬きに過ぐ。広東沙面総領事官邸ヴェランダにて、昭和五歳晩夏、作る。幅一米廿糎、豎八十糎位の陳宏としては最大の作なりといへり。

(2) 山人肖像(二)

前項(1)と殆ど同時期にして裸体半身像なり。色もコムポジシヨンも悪からず。

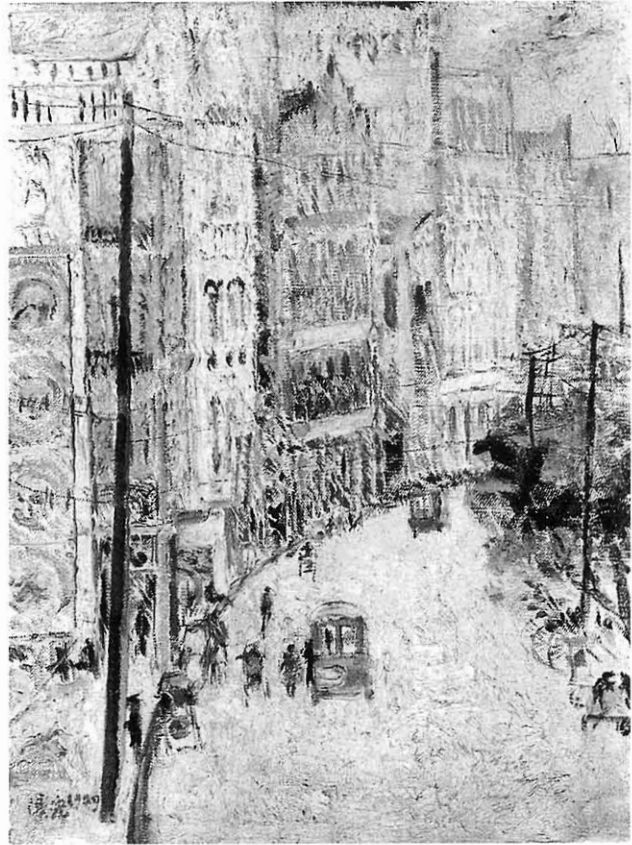
(3) 廣州市長堤の雑沓(三)(挿図14)

同時期。珠江長堤は最も広東の特色を表現せる地点にして、風物画としても面白く、陳宏独特の白色を目立たせ、広東の暑熱を画面に溢れしめたる名作なり。

(4) 嵐の前(四)

同時期作。寧ろ白色を使い過ぎし感あるも、広東唯一の天主教の会堂の尖塔の上を物凄き暗雲取巻ける情景よく表現せられたり。

挿図14



(5) 東山奇松 (五)

東山は広東の郊外にして陳宏寓居の地。広東地方に罕なる松樹、この東山一带に多し。その間に退思閣(馬德里の“El Reno”に語意通ず)なる広東政治俱樂部あり。風物画として面白し。

(6) 香港の花市 (二十八)

昭和六歳春の作。仏国派をそのままに摸したる白色の勝てる瀟洒たる作なり。

(7) 詣でる老婦 (二十九)

同上。題材支那的に面白し。

(8) 香港アーケード (三十二) (挿図15)

昭和七歳六月十八日、山人離羊に際して持来。

挿図15



(9) 静物 (三十三)

同上。

結語

以上九点共、陳宏としては逸品のみなるが、全体として尚ほ硬き点を残すも、支那洋画家としては、後に上海・南京の部に述ぶる劉海粟・王濟遠・徐悲鴻等と今に相比肩し得べき画家ともなり得べし。(中略)

第四、上海・南京時代

概言

昭和七歳夏より昭和十二歳一月廿一日迄にして、殆ど両地を兼ねたる状態にして毎二週には来往し居たる為「草堂洋画」に関する限り一単位と看做せり。蓋し画家亦その式にて京滬の間を一単位として活動し居たり。

(中略)

(乙) 支那人画家

(イ) 劉海粟

劉に就ては「京滬洋画派」〔草堂往来〕第五十八、六十三頁に詳述、又その草堂洋画二点については、前掲六十七頁に触れたり。即ち、

(1) 牛 (一二三)

(2) 瑞西風景 (一二四) (挿図16)

は孰れも倫敦中国画展の白眉にて、殊に「牛」は海粟画集の表紙に原色版となり居れり。草堂洋画間応接に於いて、常に話題となる。牛の歩み聞ゆるが如きドツシリとせる名作なり。

(ロ) 王濟遠

王についても「京滬洋画派」(前掲) 第四に詳説し、殊にその洋画作品についても、同上八十頁及び八十一頁に詳述しあれば、茲には列挙にとどむ。

(3) 室内 (四十二)

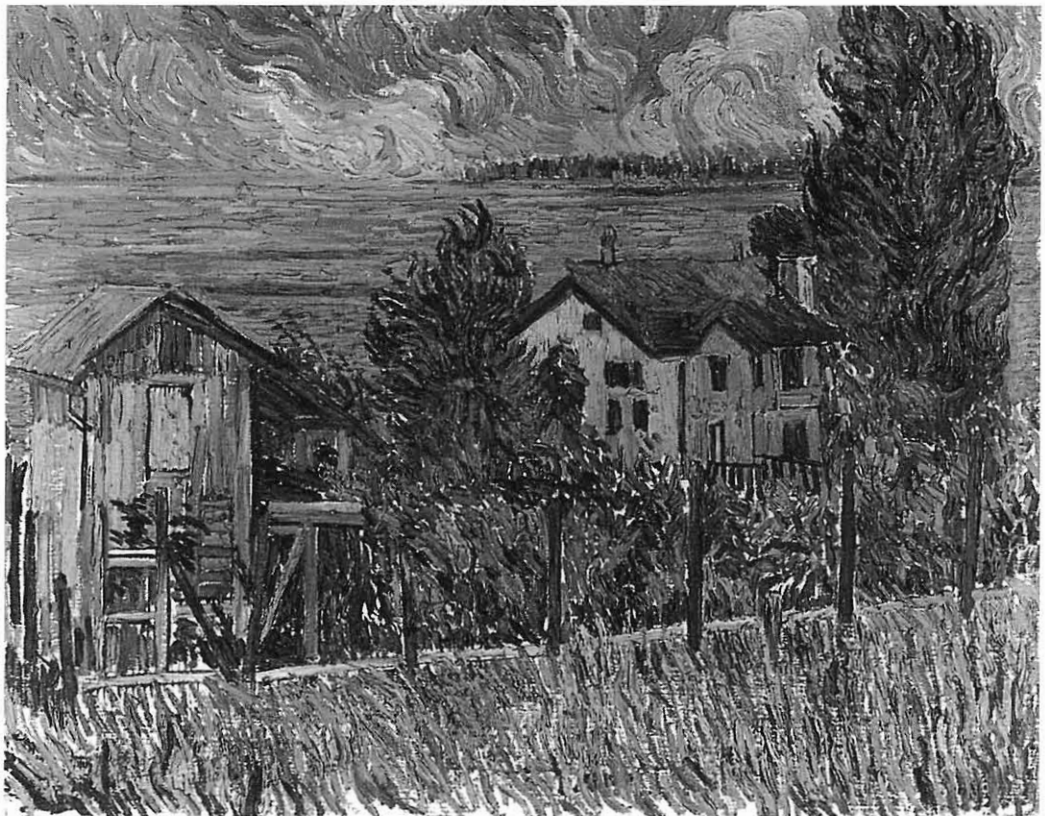
(4) 伊太利の女 (四十三)

(5) 雨後の西湖 (四十四)

(6) 中山陵紅葉 (四十五) (挿図17)

(7) 杭州紀念館 (一二二) (挿図18)

(8) 秦淮河辺 (一二三)

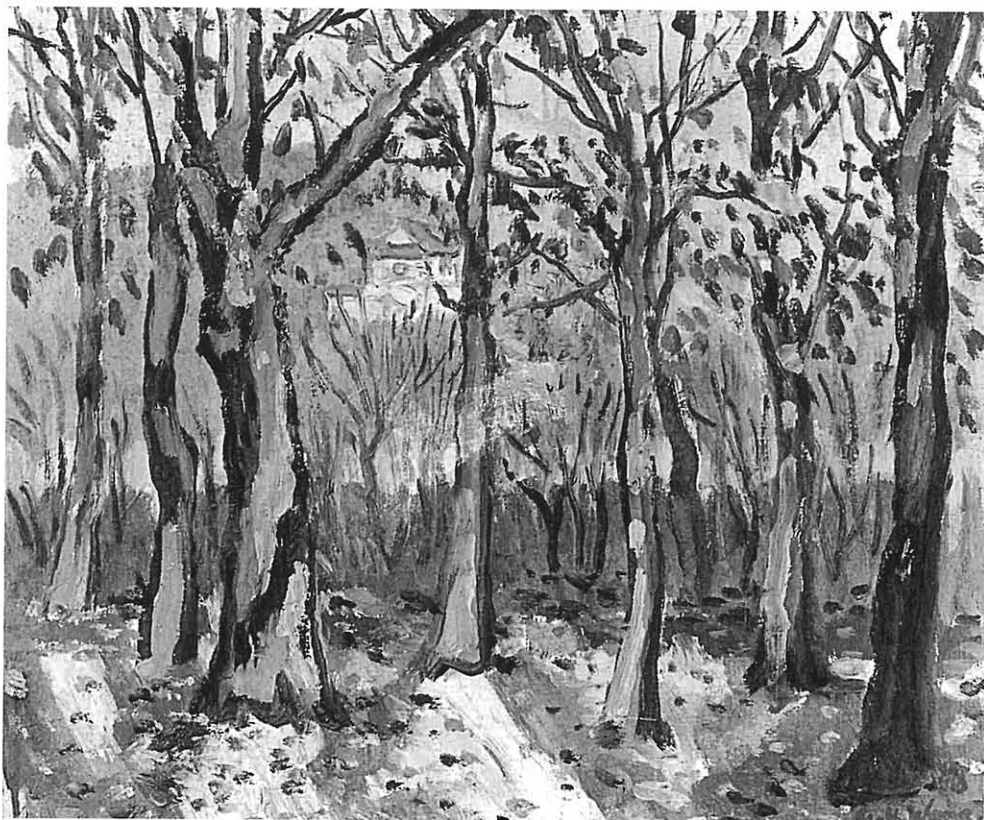


挿図16

(ハ) 徐悲鴻

悲鴻の横顔及びその国画作品の草堂に在るものについては、前掲「京滬洋画派」第二、三十一頁以下に詳述しあれば、茲にはその洋

画として草堂唯一のものたる、
 (9) 徐夫人像 (一七三) (図版18)
 を掲ぐべし。本作は昭和十一歳九月二日、譚万先に獲たる妙品にし
 て、而かも悲鴻がその夫人を描けるもの故、珍品たり。



挿図17



挿図18



挿図19

一九三三年、パリに於いて描ける逸品たり。マネーの味多し。本作に依りて、悲鴻の努力家にして、一線一点をも苟くもせざるの性質を知ると共に、国画といひ、洋画といひ、成る程現代支那画壇の

第一人者たるを慮はざるものなるを思はしむ。

(10) 柳栄楓作 蘇州風景(三三五)

(11) 郁風 朝陽(一四四)(挿図19)

民国廿三年八月、南京民衆教育館に於ける郁風・方善共同展中の非売品にして郁風の自画像なり。悲鴻の高弟なる故を以て押つけらる。

(12) 方善作 塔(一四五)

(13) 方善作 静物(一四六)

(14) 方善作 風景欄班(一四七)

(15) 夏生作 西山風景(一六一)

(16) 夏生作 北平郊外(一六二)

夏生は北京青年画家たり。

(17) 潘玉良 華山棧道油画(一六三)

潘は昭和十歳五月六日、華僑招待所に於いて名声を挙げたる個展に成功せり。悲鴻の高弟たり。

(18) 同上 青陽(安徽) 夫子廟(六四)

(19) 同上 蓮華峰(一六五)

それに、作者は逸したが、支那の手になるものに次のやうなのがある。

(20) 表象派楼閣(一二六)

昭和八歳十二月、北平で獲てゐるらしい。

(21) 同上(一二七)

(22) 広東省城(一二九)

(23) 香港(一三〇)

(中略)

第五、結言

雑然たる作者であり、画材も同様であるが、何れ草堂に在る洋画の全部を、第一のまえことばに述べたやうに、整理配分をするときに遣り直す迄の、臨時の分類である。

後記（昭和廿一年一月四日）

馬德里草堂集の千七百点についても書いて行くと（二二八乃至一四九）一層本稿に在る「草堂洋画」がなつかしくなる。

それを想へば帰朝してこの洋画も見度くはなる。そして、馬德里集とも併せて一律に整理して見度く思はれてならない。それを一有壬館に陳列して見たらどんなに嬉しいかなども思ふ。蒐集は創造だと確信しつつ、飽く迄一併一堂にかけて見度くは思ふ。そしてその蒐集当時の雰囲気なり、一切を想ひ起こしては怡しんで見度く思ふこと切である。是とてまた一片の夢であるかも知れない。全く夢であつてもその夢の魂は生きて行くであらう。

〈注〉

須磨ノート54「虚谷和尚」

1 楊逸『海上墨林』によれば、虚谷は光緒二年（一八九六）、上海城西の関廟で亡くなつており、七十三歳であつたという。そしてその徒である蘇州獅林寺方丈恬庵が棺に入れて帰り、蘇州西郊の光福の石壁山に葬つたという。これによれば、虚谷の生年は、道光四年（一八二四）になるが、Ania Chungは、虚谷晩年作品の落款により同三年（一八二三）の生まれとする。同氏論考「The Life, Art, and Travel of Xugu (1823-1896)」, KAIKODO JOURNAL Spring 1999, 参照。

須磨ノート56「蘇仁山」

2 米国カンザス大学の李鏘晋教授は、簡又文『画壇怪傑蘇仁山』（香港

大学亜洲研究中心 1970）の序文（1969年）で、「北伐時期、日本駐広州領事須磨弥吉郎、偶然在一家舖子裏看見蘇仁山的画、興味即被引起、由是不断的搜購。結果、総計収蔵了差不多一百点。這是現代人搜集其遺作之始。」と述べ、須磨弥吉郎氏の蘇仁山発掘の功績を称えている。

3

蘇仁山の生卒年について、高美慶「蘇仁山書画研究」（蘇六朋蘇仁山書画） 広州美術館・香港中文大学文物館 1990）は、生年を蘇仁山作品の自題により嘉慶一九年（一八一四）とし、伝存作品から、道光三〇年（一八五〇）、獄中において享年三十七歳で亡くなったと推定する。また須磨氏が蘇仁山を苗族出身と見なす根拠は、「高陽苗裔」という仁山の自称に由来するものであるが、これは蘇洵「族譜引」に、「蘇氏は高陽より出で、而して天下に蔓延す」とあるように、広く蘇氏一族が古の高陽帝の末裔であることをいうにすぎない。苗裔は遠い子孫、末裔の意で、苗族の子孫とする須磨氏の解釈は明らかに誤りである。近年の研究では蘇仁山の苗族出身説を唱えるものはない。ただ須磨氏によって発掘されるまで、蘇仁山とその書画作品が全く歴史の中に埋没していた当時の状況を考えれば、須磨氏のこうした錯誤は大目に見る必要がある。

須磨ノート84「草堂洋画」

4 劉海粟「画牛瑣憶」（沈虎編選『劉海粟芸術隨筆』 上海文芸出版社 2001）に「一九三二年、《海粟近作》重版、封面改用一九三一年在普陀所作的一幅油画《水牛》、……、五十多年来、我一直想念着被日本人須磨弥吉郎購蔵的這幅画」とある。

あとがき

前回同様、須磨末千秋氏・メトロポリタン東洋美術研究センター（京都）・黄炫敏氏の御協力を得た。末尾ながら深甚なる感謝の意を表す。

（西上 実）